

涙腺ニ發生セル腺腫性癌ノ一例

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38334

ルノ時ヲ期ス

最後ニ本報告ヲ爲スナ許容シ給シ恩師松原博士ノ好意ヲ謝シ、尙完全ナル研究ヲ遂ゲテ本報告ヲ全リセム事ヲ誓フ。

●涙腺ニ發生セル腺腫性癌ノ一例

金澤病院眼科 佐竹秀一

涙腺ニ生ズル胞瘍ハ極メテ稀ニシテクント氏ハ一七、〇〇〇人ノ患者中唯ダ一例ヲ見、フオシウス氏ハギーセンニ於テ二一、四六二人ノ患者中唯ダ二例ヲ見、キエニツヒベルヒニテハ八年間ニ一例モ見ズト。

涙腺ニ發スル腫瘍トシテ列擧スレバ腺腫、癌腫、「チリンドローム」、淋巴腺腫、黃褐色腫、肉腫、上皮腫、内皮腫等ナリ、然レ共其ノ發生原上皮的ナリヤ結締織ナリヤハ今日猶ホ論争アル所ナリ、以前ニ涙腺腫瘍ノ多ク癌腫ナリト認メラントモベルリン氏ノ如キハグレフエゼーミシエノ眼科書第一版ニ上皮性腫瘍ノ存在ヲ疑ヒシ性ナリ

涙腺ヨリ發生セル癌腫トシテ記載セラレシハ一八七八年フェレンステル氏ノ二例、一八九八年チエリツク氏ノ腺腫性癌ノ一例、一九〇三年ニシユルツエ氏ガアクケンフキルド氏ノ下ヨリ初メトーピアス氏内皮腫ト診セシチシユルツエ氏検査ノ結果癌腫トセル一例、一九〇四年ニホアス氏外背部ニハ外上方一仙迷ノ部分ニアル涙腺ヨリ發生セル腺腫性癌ノ一例及ビ轉移癌トシテホルネル氏乳腺及ビ腋窩腺ノ癌ニシテ涙腺ニ發セル例等都合七例此ノ

外癌腫ニ非ザルモ一八八八年ニマツツア氏腺腫ニシテ膠樣變性及ビ扁平皮癌ノ造構ヲ有スル一例及ビ昨年十二月ノ眼科學會報十二卷ニ駒井氏内皮癌ノ二例ハ其ノ造構甚ダシク余ノ例ニ似タリ此外本邦ニ於テハ書籍ニ記載シ

アルヲ見ズ唯ダ東京大學明治四一ト四二年ノ新患一五、五一五中ニ涙腺癌ナル一例アルモ未ダソノ報告ヲ見聞セズ要スルニ余ノ寡聞ニシテ涉獵セシ文獻ノ範圍狹ク文獻ノ脱漏アルハ免レザルモ東西ソノ例アマリ多シト稱スル能ハザルガ如ク嚙口稀有ノモノト云フ可シ余ガ例ハ年齢及ビ經過、症狀ヨリシテ臨床上惡性腫瘍ノ診斷ヲ下シ能ハザルカ鏡見上計ラズモ腺腫性癌ニシテソノ組織中甚ダ興味アルモノ顯ハレタルヲ以テ此ニ述ベントス
病歴、宇賀治某 二十七歳

祖父母母癌腫性遺傳ノ証明ス可キモノナシ父ハ五十一歳ニシテ患者ニ歳ノ時風邪ニ罹リ死ス母ハ五十歳ニテ腸「チフス」ニテ死ス兄一人日露戰爭中腸「チフス」ニテ死ス

患者生來健全著患ヲ知ラズ十五六歳ノ頃朋友ト争ヒ薔薇ノ枝ニテ右上眼瞼チ少シク傷創シタルノミ未ダ眼病ニ罹リシコトナシ

本病ハ明治三十八年頃他人ヨリ右上眼瞼稍ク高キヲ注意サレシモ腫瘍狀物ヲ觸レズ三年前ニ福井ノ某醫ニ痔疾ノ手術ヲ受ケ其際醫師ノ勸告ニヨリ眼瞼ノ手術ヲ施シタルモ術後ハ以前トシテ大サヲ變セズ寧ロ大トナレリ患者曰ク恐ラク腫物除去シ得ラレザリシナラム一昨年頃ヨリ大豆大ノグリ／＼ヲ觸ル様ニナリ漸次大サチ増ス様ニ感ヒラレタリ依テ三月六日來院診チ乞フ現症 体格營養中等、耳前耳後ノ顎下頸部ノ腫脹ヲ認メズ眼ヲ見ルニ右上眼外方左ニ比シ少シク隆起セル觀アリ皮膚變化ナク指ヲ觸ル、ニ上眼窩縁

ト眼球トノ間ニ外上方深部軟組織中ニ於テ小指頭大ノ硬キ球塊ヲ觸ル之ヲ移動スル得壓痛ナシ骨壁ニ癒著ナスモノ、如シ其他一般淚腺腫瘍ニ來ル眼球突出、轉位ナク運動ハ上方僅カニ制限セララル、ノミ眼底變化ナシ視力左右共ニ $\frac{6}{6}$ 即日淚腺腫瘍ノ下ニ入院セシム、

三月七日高安博士執刀ノ下ニ上眼瞼外皆ニ偏シ横切開シ摘出ス腫瘍ハ深ク移動シ易ク稍々摘出困難ナリシモ骨壁ト毫モ癒著ナカリキ、術後經過佳良第一期癒合シ患者ハ悠然トシテ三月十日退院セリ

肉眼的所見 約棗大ニシテ長徑四、五仙米、短徑一、仙米、厚サ約一二仙米、被膜様結構ニテ圍繞セラレ其質甚ク硬ク鏡見前纖維腫ヲ疑ハシメシガ定規ノ如ク一〇%ノ「フォルマリン」ニ硬化シ「チエロイヂン」ニ固定スル前ニ中央ニテ切半シ断面ヲ見ルニ一般灰白色ニシテ所々点狀シ白色塵散在ス

鏡檢的所見 染色ハ「エオジン」ハ「マトキシリン」ト「ジンギンソン」氏法ヲ行ヘリ今「エオジン」ハ「マトキシリン」染色標本ニ付テ述ベン、腫瘍ハ概シテ結構ニ被膜様物ニ包裹セララル一部腫瘍組織中ニ入りテ間質ヲナス部アリ

淚腺組織ハ一處ニ偏シ鬆粗ノ結構ニテ隔テララルリ又或ル腺系ハ遠ク隔リテ腫瘍ト全ク關係ヲ示サルアリ或ル腺系ハ甚シク壓迫ヲ被ムリ常形ヲ脱シ或ル腺系ハ破壊消亡シ一部腫瘍組織中ニ移行スル部アリ此等ハ間質組織様變性ヲ呈ス概シテ中央ヨリ淺在ニ至ルニ從ヒ腫瘍組織分ハ減退シ間質

及ヒ淚腺組織多クナル(甲)ノ片ノ中央ヨリ滞在ニ切リシモノ(乙)ノ片ヲ中央ヨリ殘部切ルニ淚腺組織漸々壓迫消亡ス然ルモ猶ホ所々腺系ヲ附ス、今腫瘍ヲ構成セル細胞ヲ大体三型ニ分ツ

一、腺腔ヲ圍ム上皮ハ概シテ二層ノ高低アル圓柱上皮ヨリ被ル淚腺組織ト

腫瘍組織ト移行スル部分ニハ猶ホ所々單層ノ母腺ニ似タル上皮ヲ附スル腺腔ヲ見ルモノ、數甚ク少シ內腔ハ空虚ノ所アルモ多クハ「エオジン」ニ總テ染ム同質性物質ヲ容ル明カニ基礎膜ヲ有ス

二、腺細胞甚シク増殖シテ管腔ヲ滿シ遂ニ基礎膜ヲ破リ細胞ハソノ形稍々大トナリ胞窠又ハ細胞窠ヲ形成シ癌索或ハ太ク或ハ細ク尖端ニテ終ルアリ網羅ヲナスアリ一見内皮細胞腫ニ似タル所モアリ

三、散在性ニ殊ニ淚腺組織ノ多クアル甲ノ片ヲ淺在部切片ハ扁平上皮ト區別シ得ザル結構ヲ呈スル細胞窠又ハ栓狀ヲ呈シ中ニハ管腔ヲ有スルアリテ「エオジン」ニ濃染スル内容物ヲ入ルアリ又第二型ノ細胞ト接觸移行様ヲ呈スル部アリ

以上外猶ホ腺腔擴張シテ囊腫狀ヲ呈スル部アリ中央部切片ノ中央ハ人工的力粘液變性ニ陥リ破壊シタルケ所アリ間質ハ所々粘液變性ヲナシテ猶ホ幼若ナル結構所々アリ淚腺組織中所々小圓形細胞ノ組織ヲ見ル所アリ

結論 要スルニ本腫瘍ハ一層又ハ二層ノ圓柱様上皮ヲ附スル腺腔ヲ有シ明カニ基礎膜ヲ有シ細胞排列又比較的万全ナルヲ見ルニ反シ他ノ一方ニアリテ腺細胞多増殖シ管腔ヲ充實シ基礎膜ヲ破リテ胞窠又ハ細胞窠ヲ形成スル明カナル移行ヲ示ス換言スレバ腺瘍ヨリノ癌腫發生シタルモノニシテ腺腫性

癌ナルハ疑フ可カラズ唯ダ此疑義ノ存スルハ扁平上皮ト區別シスル細胞ナリ斯ルハ腺腫ニ認ムル能ハザルガ故且ツ又第二型ノ細胞ニ接觸移行スル如キ所ヨリシテ癌細胞多増殖ノ結果細胞相互ノ壓迫ニヨリ斯ル結構ヲ呈スルカ又ハ是迄ノ淚腺腫瘍ノ文献ヲ讀ムモ多クハ何レモ斯ル細胞ノ遊出ヲ

見ルハ何等カ未知不明ノ表皮性基礎アルニ非ラザルカ猶ホ後究ヲ要スル所

ナリ

終リニ臨ミ恩師高安博士ガ貴重ナル材料ヲ與ヘラントルト村上教授ガ御懇篤ナル御指導ニ感謝ノ意ヲ表ス



雜 纂

● 古代ノ解剖學史

金子治郎

初メテ人間ノ腦裏ニ浮ヒタル思想中解剖學ニ關スルモノホド大古ナルハナカルベシ、人間ガ世界ニ出顯スルト同時ニ男女ノ間ニ體部分ニ相異ノ点アリテ相戀ヒ、擲ムニ手アリ行クニ足アリ視ルニ眼アリ、口アリテ食シ鼻アリテ嗅キ耳アリテ聽クコトヲ直ニ自覺セシヤ言フマデモナク、死體ノ腐爛ヨリ内部ニ骨骼ノ存在スルコトモ知り、自己榮養ノ必要ヨリ狩リ獲タル動物ヲ割キ臟腑ノ存在ヲ認メ、尙ホ「ノイギーリヒカイト」ノ慾念ニ驅ラレ臟腑ノ内部ヲモ見テ食物ノ胃中ニ收マルコトモ知得セシニ相違ナシ、去レハ形態學上ノ觀念ハ遠ク開關ト共ニ人意ノ自然ニ出テシモノト言ハサルベカラズ、斯クテ次第ニ人間ノ増加スルニツレテ生存ノ競争ヲ生ジ、競争ハ争鬪ニシテ、争鬪ヨリ負傷ヲ招キ、負傷ノ大ナルハ他ニ委頼シテ之ヲ療シ、

是ヨリ外科醫モ生シタルベク、從テ彼等ハ治療上ノ必要ヨリ進テ體部分ノ知識ヲ求メタルヤ當然ノコトナリ、斯ノ如クシテ星霜ノ移ルニ從ヒ事ハ漸ク發展セルナリ、之レ解剖學ノ自然の進運ニシテ、既ニ知識ノ要求ガ「ノイギーリヒカイト」ノ範ヲ脱シテ治療者ノ手ニ歸シタルハ當サニ斯學ノ端緒ヲ啓開セシモノトスベシ

以上ハ後世ノ人智ヲ標準トシテ往古ヲ推測セルノミ、大古ノ真相ハ素ヨリ得テ稽フベラス、而シテ有史以來解剖學ニ關シテ記録ノ報スル所ハ概ネ希臘幾盛時以後ノ事ニ係レリ、希臘幾タルヤ今ハ巴爾敢半島ノ南角ニ於テ僅ニ餘喘ヲ保ツニ過キサル一小弱國ト雖トモ、西紀前四五百年間ハ版圖モ廣ク歐洲及西亞ニ於ケル開化ノ中心トシテ世界ノ文明始ラント茲ニ集中シ、學問亦隆盛ヲ極メ碩學高儒雲ノ如ク輩出シ洽ク四海ヲ風靡セリ、就中彼ノ「イオニヤ」學派トシテ芳名竹箔ニ暉クモノハ「ラグリトス」「アナクサゴラス」「エムベドグレンス」等ノ人々ニシテ之レ等ハ哲學ニ秀ツ、次テ「アテーネ」ノ「ヒポクラテス」アリ、「マケドニヤ」ノ「アリストテレンス」アリ、殊ニ「アリストテレンス」ハ哲學ノ大家ニシテ其知識宏大無邊洽ク諸學科ニ涉リ、遂ニ自然科學ノ立脚地ヨリ哲理ノ一元論ヲ首唱シ、又一面ニハ生物學ヲ初メテ眞性學の基礎ノ上ニ据附タリ、其後彼ノ蓋世ノ英雄歷山大王ノ歿後、學問ハ一時埃及ニ移リ、次テ羅馬ニ轉シ、茲ニ於テ「ガレメス」ノ如キ大家ヲ出タシ、學運尙駁々トシテ發展シツ、アリシガ、是ヨリ幾ハクモナク妖雲西天ヲ掩ヒ歐洲ノ大變亂トナリ、自後數世紀ノ間干戈收マルノ時ナク、劍戟ニ忙ハシクシテ學術ヲ看ルノ暇ナク、不幸在來ノ記録ハ大半烏有二歸シ、其纒カニ兵燹ヲ免カレタルモノハ遙カノ後亞刺比人ノ手ニ傳ハリ（西紀六百年代亞刺比人ガ「アレキサントリヤ」ヲ占領セシ時？）アラビヤ語ニ翻譯セラレ一時世ニ稱用セラレタリ、後世之レヲ「アラビスムス」ト云フ、今尙學問界ニ「アラビヤ」稱呼ヲ留ムルモノアルハ即チ茲ニ由來ス、去レト亞刺比學派中偶々「アピセンナ」ノ如キ大家ナキニアラスト雖トモ、人體解剖ノ